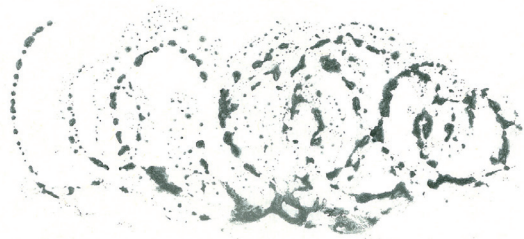


人事の哲学



人事の哲学

大転換期を支える中国古典の智

第十六話

グローバル競争、業界再編など、外部環境が急速に変化するなか、個人はいかに自己のアイデンティティ（キャリア）を確立していくべきか



田口佳史氏

Taguchi Yoshifumi_東洋思想研究者。株式会社イメージブラン代表取締役社長。老荘思想的経営論「タオ・マネジメント」を掲げ、これまで2000社にわたる企業を変革指導。また官公庁、地方自治体、教育機関などへの講演、講義も多く、1万人を超える社会人教育実績がある。最近の著書に『いい人生をつくる論語の名言』（2011年大和書房）、『老子の無言』（2011年光文社）、『論語の一言』（2010年 同）。2008年には日本の伝統である家庭教育再興のため「親子で学ぶ人間の基本」（DVD全12巻）を完成させた。

Text = 千葉 望

Photo = 鈴木慶子、新井啓太（書画）

変化が速く、価値観が多様化しつつあり、なおかつ高度成長期のような安定した雇用が望めない現在、状況に翻弄されて自分を見失いそうになっている人も多いのではないのでしょうか。迷いや苦しみのなか、中国古典はいつも灯台のような役割を果たします。今回は、個人のアイデンティティを確立するための道しるべとなる言葉をご紹介します。

「自責」の精神が
自己を成長させていく

子曰く、君子は諸を己に求む。小人は諸を人に求む。『論語』

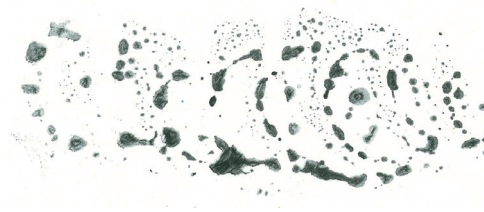
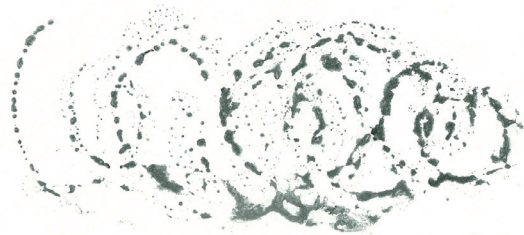
ここで語られているのは、「自責」と「他責」との違いです。一見やさしい言葉ですが、千金の重みがあります。君子は何が起きてもそれを自分の問題として反省し、改善し向上させていくもの。一方小人は、何事

も「あの人が悪い」などと他人のせいにするため、いつまでたっても自分の何が悪いかを見極め改善することができません。自分の口から「あいつが悪いのだ」という言葉が出た瞬間に、向上する機会は失われたものと思ったらよいでしょう。

「自責」はむずかしくとも、自分の内なる心に「他責」がないかどうか問う習慣を身につけてほしいものです。「他責」の風土は企業そのものから改善意欲を奪いますから、やがて業績悪化へと進んでしまいます。

子曰く、君子は能無きを病ふ。人の己を知らざるを病へざるなり。『論語』

「なぜ自分だけが高く評価されないのか?」。昇進昇格の場面などでよく聞かれる不満です。こういうことを言う社員は、昇進とか昇格の現象面ばかりを考えて、自分の実力や能力のなさを顧みることがないのでし



よう。それよりも、誰もが認めざるを得ない力をつけるとはどういうことか、じっくり考える機会にすればよいのです。ここに掲げた2つの論語の言葉は、自分を確立するための大前提だと思ってください。

「志」を立てることで
アイデンティティを確立

子曰く、^{あやま}過ちて改めざる、^{これ}是を過^いと謂ふ。(『論語』)

誰にでも失敗はあります。過ちを繰り返さないために、それを1つの経験として自分の進歩向上に結びつけなければキャリアになっていかないはず。キャリアという言葉や、ビジネススクールでMBAを取るなど資格を取得することだと思っていないでしょうか？ 我が国にも「失敗は成功のもと」というわかりやすい言葉があるように、人間としてのキャリアは、過ちを二度と繰り返さないことによって形成されていきます。

子夏曰く、小人の過ちや必ず^{かざ}文る。(『論語』)

「文る」とは言い訳すること。小人は必ずあれやこれやと言い訳して責任逃れをします。これも前の言葉と同様に、自己改善向上のせっかくの

機会を失っていることなのです。まずこうした初歩的なことをしっかりやれる自分をつくりましょう。

人の一生遭^あう所には、^{けんそ}陰阻有り、^{たんい}坦夷有り、^{あんりゅう}安流有り、^{おどろ}驚瀾有り。是れ気数の自然にして、^{ついで}竟に免る能わず。即ち^{えきり}易理なり。人は宜しく^{やす}居^おって^{やす}安んじ、^{もてあそ}玩んで楽しむべし。若し之を^{すうひ}趨避せんとするは、^{けん}達者の見^{けん}に非ず。(『言志四録』)

この連載でおなじみの佐藤一斎『言志四録』にある言葉です。人生にはさまざまなことがある。険しい道もなだらかな道も、おだやかな流れも急流もある。それはすべて自然の道理であり、誰も逃れることはできません。それならば一喜一憂することなく、人生とはそういうものだと受け止め、状況を楽しまなければいけないと一斎は述べます。苦も楽のうち。その時は苦しくても、耐えることが大切です。

「そんなことを言われても」と反論されるかもしれませんが。しかし私は、苦しみを耐えていくからこそ自己が確立できると考えています。ここしばらく、大人たちは本質的に次の世代のことを考えなさ過ぎました。「苦のなかに楽を見出す」どころか、安楽なものをあてがって、おべっかを

使うことで若い世代を楽しませようとしてきたのです。辛苦のなかに叩き落とすことが本当の愛情です。

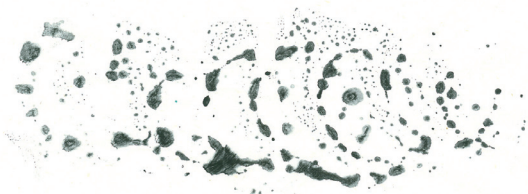
大人が言うべきことを言わないと、若い人は「忠告を受けられるチャンス」を逸するのです。今は口うるさい上司などおらず、事なかれ主義に走りがち。会社とは、若者に「仕事の道は厳しいものだ」と言えるプロ集団であるべきだと思います。

一燈を^き提げて暗夜を行く。暗夜を^{なか}憂うこと^{なか}勿れ。只だ一燈を頼め。(『言志四録』)

以前にもこの連載で紹介した言葉です。自立するためには、自分が誇れるほどの一芸を持たなければなりません。ある起業家の集まりに呼ばれたことがあります。話を聞いてみても「受け売りの起業」には迫力がありません。自分しかこれを行っている人間はいないというものがある起業家は、みな堂々としています。

子夏曰く、^{ひろ}博く學びて篤く志し、^{じん}切に問ひて^{うち}近く思ふ。仁^{じん}其^{うち}の中に在り。(『論語』)

この言葉のポイントは「篤く志す」という点にあります。広く学ぶだけではない、志を持つことが大切です。そのなかに自己の確立への道もあることでしょう。



志

志という清い泉が湧き出るところに
濁った水は入ってこない。

立志の工夫は、須らく羞悪念頭より、跟脚を起こすべし。恥ず可からざるを恥ずること勿れ。恥ず可きを恥じざること勿れ。孟子謂う、「恥無きを之れ恥ずれば、恥無し」と。志 是に於てか立つ。(『言志四録』)

佐藤一斎は「志」についてどう語っているか。「羞悪念頭」とは、自己の不全を恥じるという意味です。それがあって、「義」に発展していく。「跟脚を起こすべし」とはスタートすること。自分が至らないと思うから、もっと勉強しなくてはと感じ、スタートするわけです。自分よりも遥かに立派な人間に会うと、「なんと自分は至らないのだろう」と恥ずかしくなるはず。自分に人間的力量がないことを恥じ、どうにかしようと思う。「志」というと天下国家を考えがちですが、これこそが「志」だと一斎は言うのです。

立志の立の字は、豎立、標置、不動の三義を兼ね。(『言志四録』)

立志の「立」は、「まっすぐに立つ(よりかからない、おもねらない)」「目標を置く」「ゆるがない」を兼ねていると一斎は言います。この三拍子がそろって初めて「立志」といえるのです。

閑想客感、志の立たざるに由る。一志既に立ちなば、百邪退馳せん。之を清泉涌出すれば、傍水の渾入するを得ざるに譬う。(『言志四録』)

「閑想客感」とあるように、人間はヒマだとろくなことを考えないし、外の風評が耳に入ってそれに左右されることになってしまいます。ところが「志」を持っていれば、余計なことは考えなくなります。清い泉がこんこんと湧き出していれば、濁った水が入ってこないようなもの。心の不安や懸念も吹き飛んでしまいます。

今、あれこれと悩む人が多いのは「志」を持てずにいるからではないでしょうか。私は、解答を出すことばかりに力を入れる現代の教育にも大きな問題があると考えています。なぜなら人生とは解答がない旅だからです。かつては無謀な「志」であっても前に進むことができました。どうなるかまったく見えない。しかし熱い思いがある。こういう人間も認められたのです。

しかし今は、先行きが不安なためか、安全な道ばかりを行こうとしているように思えます。このような状況で新しい「松下」や「ホンダ」が生まれるでしょうか。松下幸之助や

本田宗一郎は、いちいち「起業する」などと言ったりしませんでした。熱い心を持って、やりたいことをやっただけです。彼らは「それをやったらどうなるんですか？」などという問いとは無縁だったはず。彼らの「志」を取り戻しましょう。

よい友と「志」を共有し
古典に学ぶことが大切

孔子曰く、益者三友、損者三友あり。直を友とし、諒を友とし、多聞を友とするは益なり。便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは損なり。(『論語』)

「志」を立て、自立した人間になるにはよい友人を持つことが大切です。孔子は益となる友人、損になる友人をそれぞれ3種類ずつ挙げています。正直な友、誠実な友、博学な友は自分を成長させてくれますが、外見がよいだけの友、人当たりが柔らかいだけの友、言葉巧みなだけの友は自分の成長の邪魔となると。

子曰く、與に言ふ可くして、之と言はざれば、人を失ふ。與に言ふ可からずして、之を言へば、言を失ふ。知者は人を失はず。赤言を失はず。



人生は複雑です。志を貫こうにもなかなかまっすぐには進めず、時には大きな壁にぶつかることもある。けれども、それを志プラスアルファとして受け入れる柔軟性も大切ではないかと思えます。そうした経験がよりゆがみのない大きな志を育んでいくのではないのでしょうか (一舛氏・談)

〔『論語』〕

「志」を共に語り合うべき人が目の前に現れても、それについて話さなければ真の友人を失う。言ってはならないことを言えば、言葉を失う。「志」を語り合って共感し合った友こそ本当の親友になれるのです。そのような「志」を分かち合える親友は、今いるのでしょうか。

孟子、萬章に謂ひて曰く、一郷の善士は、斯に一郷の善士を友とす。一國の善士は、斯に一國の善士を友とす。天下の善士は、斯に天下の善士を友とす。天下の善士を友とするを以て、未だ足らずと爲すや、また古の人を尙論す。其の詩を頌し、其の書を讀むも、其の人を知らずして可ならんや。是を以て其の世を論

ず。是れ尙友なり、と。(『孟子』)

故郷の善士は同じく故郷の善士を友とする。一国でも天下でも同様です。しかしそれでは足りないと言います。孟子は言います。古の人と語り合う、即ち古典を読むべきだと。親友になれる相手は生きている人間とは限りません。古典のなかの賢人を友人とし、これを「尙友」といい、その人と論議をする、これを「尙論」という。これを目差して学ぶ楽しさを身につけることが大切だと孟子は言っているのです。

「自己の確立」にとって古典に親しむことは必須といえます。世界に出ていこうとするなら、まず古典を学び、日本の伝統的精神にしっかりと錨を下ろすことから始めてください。

書・題字 = 岡 一舛

Oka Issou_国内外で活躍中の現代書家。「絵のような書」を模索し独自の創作活動を行っている。パリ国際サロン創立会員、毎日書道展会員。現代書展(大澤賞)、スペイン美術賞展(優秀賞)、日本・フランス・中国現代美術世界展(中国美術家協会賞)、イタリア美術賞展(優秀賞・プレスキッド賞)、パリ国際サロン(最高賞・ザッキ賞)、サロン・ドートンヌ展(入選)ほか、国内外受賞実績多数。
<http://www.isso-art.com>